

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381033

研究課題名(和文) ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「教養」理念形成と「ロマンチックラブ」

研究課題名(英文) The "culture" idea formation of Wilhelm von Humboldt and "romantic love"

研究代表者

櫻井 佳樹 (SAKURAI, YOSHIKI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：80187096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ドイツにおいて歴史的に先駆であった「ロマンチックラブ」に基づく恋愛結婚形態の一事例としてのヴィルヘルム・フォン・フンボルトと妻カロリーネとの関係を取り上げることを通して、カロリーネとの関係がフンボルトの「教養」理念形成にいかなる影響を与えたかを解明した。ルーマンなどの社会学研究を手掛かりに「ロマンチックラブ」概念を明らかにするとともに、フンボルト夫妻を事例に、18世紀ドイツにおいて、恋愛と結婚がいかに歴史的に結びついて「恋愛結婚」が形成されたのか、また愛についての理論と実践が、いかにフンボルトの「教養」理念形成に寄与したかを解明した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the influence of the relationship between Wilhelm von Humboldt and his wife Caroline as an early German historic example of a love marriage based on "romantic love". It explains how Humboldt's relationship with Caroline had a formidable influence on Humboldt's ideas of "culture" philosophy. Using Luhmann and other social studies as a starting point, to clarify the concept of "romantic love" and citing Humboldt and his wife as an example, this study examines how love and marriage were connected in 18th century Germany, how the concept of "love marriage" was formed, and theory and practices about love. It is clear that Humboldt's idealism contributed to these concepts.

研究分野：教育学

キーワード：教育思想 教養 Bildung フンボルト ロマンチックラブ

1. 研究開始当初の背景

(1) 専門分野での研究動向

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)は、思想家、言語学者、外交官、教育行政官などの多様な顔を持ち、様々な側面で研究されている。教育哲学研究においては、近年、伊藤敦広『『他なるもの』の理想化としての陶冶 - フンボルト陶冶論における古代ギリシャの意義 - 』『教育哲学研究』第111号、2015年などフンボルトの再評価がなされてきた。

またドイツ教育学会における Bildung をめぐるアクチュアルな課題は、1960年代以降活発化してきた経験的な陶冶研究(Bildungsforschung)と伝統的哲学的な陶冶理論(Bildungstheorie)の架橋をめぐる問題である。その両者を架橋するテーマとして「自伝研究」が注目されていることが今日の動向である(ヴィガー・山名淳・藤井佳世(2014)『人間形成と承認』北大路書房、参照)。そうした研究動向を主導してきたコラーやヴィガーにおいても古典的な Bildung 理論の主張者として、フンボルトは主題的に取り上げられている。

(2) 研究代表者の研究関心

研究代表者は、フンボルトの「教養」理念の形成過程を思想史的、社会史的に研究してきた。青年期フンボルトがヘンリエッテ・ヘルツらと結成した「育徳(美德)同盟」(Tugendbund)における特異な交友関係を「社交性」を手がかりに明らかにする目的で、平成19-21年度の科学研究費「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成における社交性の問題」(基盤研究(C)課題番号19530705)の交付を受けた。その研究を通して、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「教養」理念の内実において、「他者との結合」「相互作用」などの「社交性」が非常に大きな意味を有していることが明らかになった。

その後妻カロリーネ(Caroline von Dacheröden, 1766-1829)との出会い、婚約から結婚へと関係が進化していくなかで、彼の「教養」理念がいかに進展したかをさらに詳細に解明することを目的として、平成23-25年度の科学研究費「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成と『愛の書簡』」(基盤研究(C)課題番号23531012)の交付を受けた。それらの成果として「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとドイツ書簡文化」(中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第58巻 2012年) "Zur Entstehung des Begriffs der Bildung in Deutschland und Japan"(日独における教養概念の成立について)(ドイツ教育学会「陶冶・教育哲学委員会」の2013年年次大会での発表:ドイツ連邦共和国・ヴィッテンベルク大学)がある。

本研究はこうした研究成果を継承し、さらに発展させるものである。とりわけ、歴史的

に先駆的であった「ロマンチックラブ」romantic love に基づく恋愛結婚などの社会史的な意味を解明するという視点から、カロリーネとの関係がフンボルトの「教養」理念形成にいかなる影響を与えたかを明らかにするものである。

2. 研究の目的

フンボルトは「育徳(美德)同盟」Tugendbund 内でカロリーネと知り合い恋愛結婚するに至った。したがって、第1の課題は当時における「恋愛結婚」のもつ意味について明らかにすることである。当人同士による自由な交際と結婚は近代の現象である。結婚は恋愛を基礎とすべきであるが、結婚に至らない危険を伴うものである。「ロマンチックラブ」概念を明らかにするとともに、フンボルト夫妻を事例として18世紀ドイツにおける実態について考察していく。その際妻カロリーネの生い立ちを明らかにすると共に、なぜフンボルトと結婚したのかについて、カロリーネの視点から明らかにする。第2の課題は、フンボルトがカロリーネとの出会いから、婚約そして結婚へと形が変化していく中で、すなわち関係が友愛から愛へと進化していく中で、彼の「教養」理念がいかに進展したのか、書簡を丁寧に跡づけることによって、彼らの「愛」の体験が彼の初期の著作に対してどのような影響を与えたのかを解明していくことである。

フンボルトとカロリーネとの関係からフンボルトは、男女の性差に関する問題意識を発展させ、比較人類学研究へと向かっていった。したがって、第3の課題は、男女の違いというフンボルトの類型研究に対して、フンボルトの自己自身や妻に対する性格理解がどう反映したのか、明らかにすることである。つまりカロリーネ個人の特性と女性性一般の性質を比べることである。

3. 研究の方法

フンボルトやカロリーネの報復書簡や二次文献をドイツ国内はもとより日本においても収集し、それらを精読するという文献研究の手法によって行った。その際、フンボルトの「教養」理念の形成過程を思想史的・社会史的にアプローチした。出来上がった彼の理論や業績を表面的に理解するだけでは、その真の意味内容に達しないと考えるからである。さらに「ロマンチックラブ」概念の先行研究としてルーマンや大澤真幸などの社会学研究を参照した。

4. 研究成果

(1) 主として第1の課題、第2の課題に対応するものとして、「ロマンチックラブからみたフンボルトの恋愛結婚と教養理念」を中国四国教育学会 第67回大会(2015年11月14日 於:岡山大学)にて口頭発表した。

ルーマンの愛のゼマンティック

現代の社会構造をシステム論として解明し、教育学にも多大な影響を与え続けている社会学者ルーマンにも「愛」に関わる重要な著作がある（Luhmann, Niklas: *Liebe als Passion*. Frankfurt am Main 2012（邦訳：ニクラス・ルーマン『情熱としての愛』木鐸社 2005）。これは愛の観点から近代社会を捉えた歴史社会学研究である。ルーマンは、近代社会の成立を「成層的分化から機能的文化への移行」に見ているが、そこで生じるのはパーソナル・システムと社会システムとの強力な分化である。というも機能的分化が生じると、個人は社会の特定の下位システムに縛られずに浮遊せざるを得ないからである。佐藤勉は、インパーソナルな関係が増大した近代においてこそ、パーソナルな関係が本格的に生起したとするルーマンの着眼点を評価する。官僚制やグローバル化が進行し世界がシステム化された時代において、パーソナルな関係が深化したというわけである。その点で、佐藤勉によれば、「愛のゼマンティックと個人の個人性のゼマンティックの関わり合いが決定的に重要だ」（ルーマン 2005:287）とする。というも「個人の個人性のゼマンティックによっていよいよ自由な意思決定ができるようになった個人が、愛のゼマンティックを介することによって相手との深い関わり合いをはじめて可能にした」からである。ルーマンは人間の個人化と親密な世界の必要性を無条件に並行して進展するものとはみない。両者を接続可能にするコミュニケーション・メディアとしての愛のゼマンティックが成層的に分化した社会から機能的に分化する社会への移行とともに、いかに分出され、変容したかについて、17-18世紀のフランスの長編小説を主たる対象として考察したのである。

恋愛結婚としてのロマンチックラブ

社会学者の大澤真幸は、18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパの愛の歴史に重大な亀裂が走ったとして、「ロマン主義的な愛」romantic love の登場をあげている。大澤は、ルーマンの「ロマン主義的な愛」の特徴を「愛の関係の自己準拠性」（愛する理由を社会的に規範化された理想：家柄、高位等ではなく、愛しているがゆえに愛している自己を根拠にして）と「視点の二重性」すなわち「内在的な視点（恍惚を導く）」と「超越的な視点（反省を導く）」にみている。そのことによって愛の情熱に揺らぎが生じても、超越的な視点によって時間的な変化の中で持続可能なもの、すなわち愛の同一性の保証によって、愛と結婚の結合が可能になったのではないかと考えている。

ところで、ルーマンは『情熱としての愛』の「第14章 愛と結婚」において、今や配偶者選びは、配偶者自身によって正当化されねばならないという構造変化に対処するた

めに愛というコミュニケーション・メディアを発達させることになったと述べると共に、そのゼマンティックの国柄による差異について言及している。「そのゼマンティックは、一部は結婚外の情熱を指向し（フランス）、一部は家庭生活本意に指向し（イギリス）、一部は人間陶冶に指向し（ドイツ）た」（ルーマン 2005:224）と。このように愛のゼマンティックとしてドイツでは人間陶冶（Bildung）があげられているのが、興味深い。ドイツにおいては、恋愛と結婚と陶冶が結びつくのである。またルーマンは、「第13章 ロマンチックラブ」において、18世紀になって「環境、状況、教育、旅行、交友関係などの人格形成への影響についての洞察がその後漸次的に芽生えている」と指摘すると共に、「その世紀の末になってはじめて（実際には、もっぱらドイツ哲学において）自我の存在の世界性と自我の世界投企の主観性を主張する、あの急進的な定式化が見出される」として、ここで註をつけ、フンボルトの陶冶論を参照させているのである（ルーマン 2005:201）

フンボルトの恋愛と結婚

ゲッティンゲン大学生ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、1788年8月カール・フォン・ラロッシュを介して、カロリーネ・フォン・ダッヘレーデンとはじめて出会った。それは「育徳同盟」Tugendbundの活動の一環であった。その後1789年12月16日エアフルトの舞踏会で婚約し、1791年6月29日にエアフルトで結婚式を挙げた。カロリーネは元来はカール・ラロッシュと結婚するつもりであった。1790年4月21日付けのカロリーネからフンボルトへの第42書簡では、カールとの別れの原因について触れている。そこでカロリーネは、財産や家柄ないし人柄を結婚相手に求めるのではなく、相手との相性を決める「個人的感覚」individuelle Empfindungや「享受」Genussを結婚の際の判断基準にしている。フンボルトとは同一の階層出身であったが、このように女性自身が親の意向ではなく、自らの感覚に判断を求める「自己準拠性」とともに、男女の同等性を示す恋愛結婚だったと言えるだろう。

フンボルトは1790年6月19日ベルリンからの第57書簡において、「君のように他者と関わり、他者の中に入っていき者は誰もいない。・・・君は完全に他者をありのままに見ており、観察の純粋な結果と豊かな君の感覚を結びつける」とカロリーネの感情移入と観察力を評価している。またフンボルトは、人間の本質（全体的人間）の洞察を求めようになり、それがカロリーネの側にいることによって、「愛のまなざし」Auge der Liebeを通して実現できるという考えに至る。それは感性と精神の統一されたまなざしである。

カロリーネがフンボルトに求めたのは、自立性と他者への献身の一致であったように、フンボルトもカロリーネに求めたものは自

由と愛の両立であった。

フンボルトの教養理念

これらの経験がフンボルトの「教養」理念にいかんにか反映しているのだろうか。

フンボルトの「陶冶論」(1794)においては、次のように定式化された。「われわれの存在に関する究極課題とは、次のようなものである。われわれの人格のなかに、われわれの生前と死後を問わず、われわれが後に残す生き生きとした活動の痕跡によって、人間性の概念に対して出来るだけ多くの内容を与えることである。このような課題を解決するには、われわれの自我を世界と結びつけて、最も普遍的で、最も活発な、最も自由な相互作用を保つほかになす術がない」と。この人間(自我)と世界の相互作用の関係、とりわけ世界をどう捉えるかについてフンボルト研究者は苦慮してきたが、メンツェやコラーは、他の人間も含まれると理解している。

また「教養」理念を定式化した『国家機能限界論』(1792)においては、人間形成のためには「存在者の内部に由来する結合によって、人間は、他の人の富を自分のものにしなければならない」と「他者との結合」の重要性を指摘したが、「結合における教育上の効果は、統合されたものの自主性と同時に、結合の親密さの度合いにかかっている」として、「親密さ」と「自主性」という二極性を重視したのである。そしてこれはフンボルトのカリーネとの恋愛結婚、ロマンチックラブ体験が反映していると言える。事実同書に「国家は結婚をまったく個々人の自由な意思にまかせるべきであって、そしてまた個々人の間に成立した様々な契約、結婚それ自体、結婚のいろいろな異なった形までも、個々人の自由な意思にまかせるべきなのである」と、未だ成層社会であるドイツにおいて、本人の意思を尊重した自由な恋愛結婚を求めたのである。そして、それはまたフンボルトが人間の真の目的である人間陶冶(Bildung)のために必要な条件だと理解していたからであろう。

以上、ドイツにおいて歴史的に先駆的であった「ロマンチックラブ」romantic love に基づく恋愛結婚の一事例としての、フンボルトとカリーネとの関係が彼の「教養」理念形成に多大な影響を与えていたことが明らかになったのである。

(2) なお最終年度の2016年10月13~15日にドイツ連邦共和国・ドルトムント工科大学で開催されたドイツ教育学会・教育史研究部門との共同開催による質的陶冶並びに自伝研究委員会の2016年次大会に参加し、「Die Romantische Liebe(romantic love) und Bildungsidee in Deutschland und Japan (邦訳:日独におけるロマン主義的愛(ロマンチックラブ)と教養理念)と題する成果発表を行った。

前半は、ドイツにおけるロマン主義的愛(ロマンチックラブ)と教養理念の成立過程について述べた。そこでは、ロマン主義的愛(ロマンチックラブ)と教養の関係、またヴィルヘルム・フォン・フンボルトの恋愛結婚と教養理念について言及した。後半では、日本におけるロマン主義的愛(ロマンチックラブ)と教養理念の成立過程として、大正教養主義を代表する作家倉田百三の『愛と認識との出発』(1921)を取り上げた。それは倉田の21歳から29歳にかけての論文集であり、真理、友情、愛、性、信仰などに関する悩める青年の思索の結晶であった。それは遅れて来る青年たちへの贈り物として、倉田の靈魂の成長の記録を赤裸々に描いたものであり、事実戦前の旧制高校生の愛読書の一つであった。恋人とともに暮らし、人間陶冶の計画を遂行したいという彼の願いは、結核という病と失恋によってもろくも崩れ去った。フンボルトの事例と比較すると、当時の日本には教養と愛の観念を導入するための前提が、つまり大澤がルーマンとともにまとめたように、倉田には超越的な視点、つまり自己反省が欠けていたということが言えるのではないだろうか。いずれにせよ、教養思想家としてのフンボルトと倉田の違いは、日独における陶冶過程の歴史性の違いを反映していると言えるのである。

この研究成果は本研究課題を含みながら、日独の比較研究を行うという発展部分を含んだものになっている。当初の研究目的の全てを達成したとは言えないが、こうした発表を通して、「日独における『教養』(Bildung)概念の比較思想史」という次なる科研の課題設定に繋がったし、ドルトムント工科大学のヴィガー教授やマティヒ教授と連携して研究を遂行していく基礎を築くことができた。日本学術振興会をはじめ関係各位に謝意を表するとともに、今後ともさらに研究を進展させ、残された研究課題を果たしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 3 件)

SAKURAI, Yoshiki Die Romantische Liebe(romantic love) und Bildungsidee in Deutschland und Japan (邦題:日独におけるロマン主義的愛(ロマンチックラブ)と教養理念)ドイツ教育学会・教育史研究部門との共同開催による質的陶冶並びに自伝研究委員会 2016年次大会 2016年10月14日「ドルトムント(ドイツ連邦共和国)」

櫻井佳樹「ロマンチックラブからみたフンボルトの恋愛結婚と教養理念」中国四国教育学会 2015年11月14日「岡山大学(岡山県・岡山市)」

櫻井佳樹「ビルドゥング概念から見た教養教育」教育哲学会 2014年9月14日「日

本女子大学西生田キャンパス（神奈川県・川崎市）」

〔図書〕（計 2 件）

小笠原道雄編『教育哲学の課題「教育の知とは何か」』福村出版 2015 年 407 頁（共著 76-90 頁）

矢野智司『マナーと作法の人間学』東信堂 2014 年 183 頁（共著 34-67 頁）

6．研究組織

(1)研究代表者

櫻井 佳樹 （ SAKURAI YOSHIKI ）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：80187096